一日の保安と萬一の遁竄を求めやうとした。

敵は動もすれば赤十字旗を醜して死体收容を企てんとし、其の他此種の奸策を弄して我軍を欺瞞せんとしつゝあり、現にイルチス砲臺の南方に在る火藥庫には赤十字旗を掲揚し石油、火藥庫等苟も砲擊を恐るゝ重要地点には、總て此種の慣用手段を執り居れり、更に一方我野戰重砲部隊は、赤十字旗を樹てたる一隻の支那戎克が青島を出て流亭方面に航行するを認めたるを以て、直に發砲停船を命じたるに、戎克は倉皇として滄口に上陸したれば、我は直に之を捕獲し、●●荻原參謀出張取調を爲したり、船中には赤十字の腕章を附したる支那人二名ありて、余等は支那紅十字隊に屬し日本傷病兵救護の爲め赴くものなりと稱し、懷中には日本軍司令官に對し同樣の意味を認めたる一通の書狀を所持し居たるも、船中一の衛生材料を有せず、明に獨逸間諜たるに相違なきを以て、目下引續き取調中なるが、獨逸軍が赤十字條約を無視せる背信行爲に對し

ては、斷じて假借すべからざるなり云々。

右の攻圍軍司令部報告書は、窮せる敵の消息を明かに語つてゐる。彼等は、眞に俎上の魚だ。

我が岳南旅團は、其の進軍の行程を多少變更して、戰線の最右翼に陣地を敷くことゝなつたのである。

濱松聯隊は戰線に立つた。

而し、靜岡聯隊は機關銃隊を除く、他は悉く鐵道守備隊を命ぜられたのである。

濱松聯隊の健兒は

『三方原頭で鍛えた腕節を發揮するは、之れからだ』と勇躍した。

靜岡聯隊の健兒は、斯うした意氣込みを見せつけられ脾肉の嘆に堪へなかつた。

それでも、機關銃隊だけは、得意の鼻を蠢動させずには居られなかつた。

獨り、我が岳南旅團のみならず、其の他の旅團も豫定の陣地に就いた。そうして、一大壯擧の準備は、全く成つたのである。

一日――

二日――

日は斯うして徒らに經つて行つても、

『總攻擊開始』

といふ、待ちに待つた快命令は、容易に下らなかつた。戰線の各將士は、等しく腕を撫でた。その癖、敵の砲擊は、間斷ない。

爆聲と硝煙と――健兒は、それ等を睨みつゝ空しく『命令一下の日』を鶴首して待つて居た。血氣にはやる年少將校や、兵卒の意氣込みを宥め倦んだ渡邊攻城軍司令官は、要塞攻擊の要旨を語つて曰く、

要塞戰が、花々しき野戰に比して遙かに地味な事は、國民一般に知れ渡つてゐる所であらう、我戰鬪員さへも最前線にある者は、間斷なく敵に砲擊さるゝを癪に障へ、屢々應砲せん事を迫るも強て沈默を守らしめ、作業を進めて居る、戰爭を爲すの必要ありとならば、屈竟なる機會にて、敵の堡壘一つや二つは奪取する事容易てあらう、而し之を取つたとて、敵の有力な堡壘砲臺が、他に健在する以上、折角奪取した堡壘に忽ち砲火を集中され、徒らに損害を受けて再び之を敵手に委せねばなるまい、殊に總攻擊を開始したとて、直に陷落すべきものではない、先づ威力ある攻城砲に依り、敵の堡壘砲臺を一時に襲擊し、砲及び防禦物を破壞した上、歩兵を送りて確實に之を奪取せしむるのだ、攻城砲の威力は大なりと雖も、兵に損害を與ふる事は比較的小なれば、假令敵の砲臺を沈默せしめたとて、敵の兵が全滅したとの測定は餘りに早い、敵は必ず我軍の强襲に備ふる丈けの餘力を存して、後方に退却し、我軍の乘込むを待つて更

に最後の戰鬪を爲すものと見るが正當なれば、さう易々と全部陷落するものではない、故に堅忍持久、兵員と經費を有意味に節して、最後の目的を達せねばならぬ云々。

此の方針に基いた我が軍隊は、果して沈默裡に機の到るを待つた。第一線にある健兒は、何れも穴居といふ變つた姿であつた。——そうして、敵彈の襲擊を避くるのである。

——我等は目下我軍の最前線に穴居の生活を致し居り候、敵の砲彈は晝夜の別なく我等の頭上に飛來り、前後左右に爆裂する有樣、壯觀を極め居り候、此穴居中の味は到底門外漢の知る能はざる處と存じ候、此地は敵の前哨と相距る事八百乃至千米突にして、夜間は双方の斥候衝突有之、多少の負傷者も出だし居り候、小生等は時々穴の中より這ひ出でゝ前方を望めば、青島の大港は目前に展開し、人馬歷々として指点され候——此んな、書信を、遺族に寄せた健兒もあつた。

鐵道守備と云つても、敵彈は常に第一線の上空を飛び越えて、三里乃至五里の後方に爆裂するため、靜岡聯隊の健兒は、矢張り彈丸雨下の戰線にあると、同じ境遇であつたのである。

異樣な響音を發しつゝ、敵の砲彈が頭上を掠めて行く時、思はず拳を握つた我が健兒の群は、

『小癪な』

と、等しく呟やいた。

(二) 壯烈第一飛報

十月二十五日の夕まぐれ。——岳南の健兒が、岳南の地を首途して、恰度二十日

目のことだつた。

靜岡市内を隅から隅まで、せはしなげに走つて行く新聞號外の鈴の音は、岳南健兒の活躍に伴ふ最も壯快な、第一飛報であつたのである。曰く

『十月十二日の日沒頃我が靜岡聯隊の機關銃隊一隊は、即墨より三哩餘前方の山上より下る途中山の鞍部に於て敵の將校斥候らしき、中尉一名下士一名卒一名の一團に遭遇し、敵の將校は直に短銃を向く、我が寺尾軍曹も直に短銃を發射したるに命中せず、次で敵は短銃を投げて拳闘を以て杉山一等卒に抵抗し來り、茲に忽ち大搦闘となり、杉山、寺尾、朝比奈の三健兒は、遂に敵の三名を捻伏せ、出發の際水汲用として給與されし六尺餘の麻繩を手に手に持ち居りたるより、之にて三名を後手に縛り上げたるに、將校は之を見て我だけは縛さずとも最早抵抗せずと手を合せしより、三人共難なく俘虜として、後方部隊に連れ歸りたり、敵は拳闘と靴にて蹴るとは非常に巧なるも、一度組打を爲し足を

取れば一堪りもなし』云々

杉山一等卒とは靜岡市鳥見町の杉山兼吉氏——朝比奈とは、歩兵一等卒の靜岡市安西南裏朝比奈兼吉氏——それから寺尾軍曹とは、安倍郡千代田村沼上寺尾作次郎氏のことであつた。

揃つて發揚した岳南健兒の意氣！確かに富嶽の偉容に育くまれたゞけあつた。勇躍欣舞、殆んど吾を忘れたのは、獨り三氏の遺族のみではなかつたのである。

是れ、岳南健兒功名帳の、實に第一頁であつた。

越えて、十月二十九日には、壯烈なうちにも悲しむべき次ぎの如き戰報が、聞く人々の胸を打つた。曰く

濱松聯隊所屬の伍長佐藤仁平氏外四名は、潛伏斥候として十月十七日、モルトケ砲臺の程近きダンチール附近を警戒中、同日未明約三倍の敵と衝突し、勇戰奮闘能く任務を全うした、而し一行中の一等卒山田五郎(二十五才)氏は、敵

の砲彈及び小銃彈のため頭部其他に大負傷を爲し、名譽の戰死を遂げた、その特功により、即日上等兵に進級せられた』云々。

――斯くて、岳南旅團奮鬪史の第一頁を飾るべく、血を以て自己の生涯の凡てを犧牲たらしめた山田五郎氏は、磐田郡中泉町二の宮山田勇吉氏の長男であつた。そうして、斯かる果敢な部下をして、極めて意義ある最期の花を結ばしめた當日の潛伏斥候長歩兵伍長佐藤仁平氏は、濱松市新町佐藤榮助氏の孫であつたのである。

血腥い新聞號外は、日と共に殖えて行つた。――十月も將に暮れやうとして、富嶽山頂の白雪愈々白く、背戸の蜜柑はボツ〳〵色づいて、朝寒む、夜寒むの日が折折訪れた。砲彈雨下に起居する戰地の悴――弟――戛人――友の身の上が、一入氣にかゝる頃とはなつた。

――戎衣の袖に、雨の雫が身に泌みもせう。

其十一 旭旗翩翻！

(一) 記せよ十一月七日を

總攻撃！

總攻撃が近づいたといふ事は、人の口から聞かなくとも、山東の大自然が自づから語つてゐる。――來らんとする大戰爭の前の靜けさを感知せよ。敵の砲臺から放つ砲彈も、數日來めつきり數を減じた。初めは何うしてあゝも濫發するだらう。いづれは矢折れ彈盡きたのを是れ幸ひの言草にして、降伏するのだらうと素人目にも觀測されてゐたが、今や敵の射たなくなつたのは、全く總攻撃の近づいたのを知つ

てゐるからである。着彈距離の遠い彈は、目の下の戰爭には必要がない。……どうせ必要のない彈なら、無暗矢鱈に射ち散らせよ、といふ量見でゞもあるのだらうか。

而し、猪勇に近い彼等は、其處に何んな策戰を描いてゐたか判明らない。……殊に、青島は名だゝる堅塞。……少量の犧牲に對する夥多の報酬を收めやうとの兵法に在つた我が軍は、出來るだけ堅忍した。自重した。當時、我が軍事通の曰く

『流石頑强な敵軍も、我軍の連日に於ける海陸兩面からの偉大な攻擊に對しては、周章狼狽策の施す可き餘地が無かつたと見え、大分窮した摸樣だ、我が淨法寺旅團の屯する海泊河左岸の敵堡壘の以置は、我軍の陣地よりは、少しく高い地で、同河を若し谷とすれば、恰も崖のやうだ。

小湛山の堡壘は、之れよりも遙かに高く、イルチス、ビスマーク、モルトケの三砲臺は、何れも山上に築造されて居るから尙一層に高い、海泊河左岸の敵壘は、其數が六個（內二個は連接して一堡壘をなして居る）なのである、此の

六個は何れも、最近に築かれた最新式永久的の堡壘で、其構造の堅牢な事は旅順に在つた堡壘等の比てはない、又大きさもイルチス、ビスマルク、モルトケの三大砲臺に匹敵して居る、此砲壘中には敵の步兵が輕砲を持つて入つて居り重砲は勿論、火砲は自衛上の二三を除き全く備へて居らぬ筈だ。

併し其後方には尠からぬ砲臺があつて、此砲壘を掩護する加之ならず、其前方には幾重かの鐵條網と麄柴拒馬其他で圍み廻して居る、何しろ之れが主なる砲壘線と思はれるから、我軍の攻擊は頗る困難であらうけれども、此線を陷落せしめれば青島市內迄は一里にも足らないから、我砲彈は遺憾なく市內に到着する、從つて彼の運命は旦夕に迫ると言つても然る可きだ、砲彈丈では却々砲臺は落ちるものでは無い故に、岳南旅團の步兵は大に活躍を試みて居るに違ひない、又た八釜しい中間砲臺とは、主砲臺相互間に在るものを言ふので、左右の砲臺の射彈距離が假に三千米突とすれば、二千米突位有効の砲を備付け、又其

後方の砲臺は五千米突利く砲を備へて居る、そして之等は、皆一点に集注するやうになつてるのだから、攻撃の困難なこと察するに餘りある』云々。

十月三十一日——

今上陛下の天長の佳節である。

そうして、我が日東帝國上下民衆の、最も祝福すべき欣びの日であつた。

此の欣ぶべく紀念すべき佳節を期して、實に總攻撃は勇ましく開始せられたのである。精鋭な、果敢な、我が常勝兵の射撃する砲の響き——銃劍閃々！そこに湧く突喊の聲々、地軸も、天柱も、一度に揺けたかと思はれた。

漠々たる硝煙。

濛々たる戰塵。

天地晦冥。

青島籠城軍は、正に此の刹那を以て、萬事休す。

——總攻撃開始の一兩日前の早朝膠洲灣内大港入口附近に於て、敵の商船三隻同時に火災を起し一隻は沈没、他の二隻は續いて同じ運命に陷らんとしつゝある、敵の商船が港外に於て三隻迄も同時に火災を起すが如きは、普通の場合到底偶然の事故として想像することが出來ない、且つ同灣内にある敵の商船中、船足の早いものは開戰前早くも逸出し、現在殘る所の船舶は、運送船六七隻の外極めて少數の商船のみで火災を起した三隻は、同灣内に於ける商船の全部と見做すを得る。

故に火災の原因は、我軍の砲撃其の他の偶然發生したる事故にあらで、寧ろ敵軍が何等か計畫する所あり、故意に自滅を企てたるものではあるまいか、今日の場合

灣内の船舶が我封鎖線を突破して外海に逸出を企てんとするは、全く空想であるから、此儘の狀態を以て時日を經過する時は、青島開城又は陷落の曉、同港内に在る一切の船舶は擧つて之を日本の手中に任ねばならぬ、そこで、敵軍の方針としては既に相當に任務を了へた船舶にして何等の兵備のないものは、一日も早く自滅を企て、順次之を他の船舶に及ぼし、軈て兵備あるものは兵備を撤して此例に慣はんとするものであらう、例へば、三隻の商船が火災を起してより沈没し了る迄に、比較的長時間を費したのは、搭載荷物を撤して、船体の大部分を解いた結果で、燃燒に困難な狀態に在つたのだ。

商船の自滅は青島の運命と果して如何な關係を生ず可きか、一方に於ては所謂背水の陣を布ひて青島守備軍の士氣を皷舞し、殊勝にも最後迄死守せんとするの意氣を示し、他の一方に於ては、全く之と反對に開城の期日既に切迫せるかのやうな、自暴自棄的擧動に出づるなど、開城か、死守か、要するに不可解である云々。——

此んな說を傳ふるものもあつたけれど、總攻擊の火蓋を切つた以上は、モウ開城も死守も何物もない。

眞に、駘も亦た及ばずだつた。

山東の野に在つて、敵と砲火を交へてゐる我が出征軍は、天長節の祝日當時、如何なる行爲に出づるかは判然しないけれど、日露戰役の時は、總ての野砲に特に藥を强烈にした實彈を籠めて、敵壘に向ひ、各百一發宛の祝砲を發したから、今回も右の例に習つて行ふだらうと思ふ。

此んなことを、天長の佳節の前に口外した我が一將校もあつたが、果してこの日は、澤山の實彈が飛んだのであつた。——而も百一發どころではない。

斯くて、全線に亘る奮鬪激戰八日間、そこに、忌憚なく日東常勝國の『精華』を發揮して、遂に、常勝國民の永久に記念すべく、又た忘れ得ぬ

『十一月七日』

といふ、歡樂の日を形つたのであつた。——

(二) 健兒の奮鬪

右翼隊——海泊河附近一帶の高地を、其の陣地としてゐた我が岳南旅團は、總攻擊の開始と共に、濱松聯隊全部と、靜岡聯隊第二大隊をして、其の最前線に立たしめたのである。

三方ヶ原の沃野に鍛えた濱松聯隊の健兒と、そうして、岳麓の嶮岨に鍛えた靜岡聯隊の健兒——そこに、

『何うしても、功名負けをするな』

と云つた、強い敵愾心が發露せられて、念頭に浮ぶは

『敵軍屠れ』

の只だ一念。

殊に、健兒の隸屬する右翼隊には、山田良水少將の統卒する第二十四旅團の健兒の一部も含まれてあれば、又た、英國旅團少將バーナージスト氏の統卒する軍隊の一部も含まれてあつた爲め、更に、更に、數段の勇躍心を衝いたのである。

故山を離れて今や將に一ヶ月。

夢結ばれぬ陣營の假寢にすら、——勳功を立てゝ、家鄉に待つ遺族の人々に、褒められやうと、燃える思ひを忘れたことのない我が健兒等は、面もふらず躍進した。

地軸を揺くやうな巨砲の爆音。

漠々たる硝煙の中に閃めく劍光縱橫。血腥い慘風。

屍山。

血河。

戰鬪は、刻一刻と熟して行つた。——

總攻撃開始の第二日――十一月一日。

靜岡聯隊の少尉丹羽●●●氏（二十四才）が奮戰中、敵の砲彈の破片に觸れ負傷した。

恰も同じ其の日、濱松聯隊の少尉黑川●●●氏（二十五才）も傷ついた。

――濱名郡神久呂村歩兵一等卒鈴木●●●●太吉氏――同郡曳馬村野口歩兵一等卒神谷●●●●氏――引佐郡中川村輸卒本田●●●●八十松氏――それ等の人々も、敵彈に傷いた名譽の負傷者である。

十一月三日――

此の日、戰線に立つて頻りに指揮刀を振つてゐた濱松聯隊の少尉村越●●●●卯平氏（二十七才）は、敵彈の襲撃を受けて、壯烈な戰死を遂げた。

――岳南旅團出征以來初めての將校戰死者！

戰友は泣いた。

遺骸は、戰友の手で叮重に茶毘に附せられた。

こゝ、壯漠たる海泊河附近の一丘陵――赤ちやけた、土の新らしく盛られた上に一基の墓標。

『陸軍歩兵少尉村越●●●●卯平の墓』――戰友の手向けた野花の一本が、夕陽に寂しくうなだれてゐるさまを想像せば、村越●●氏を知るものも知らぬものも、堪へ難い悲哀を感ぜずにはゐられない。

――淨法寺●●●●少將も、手づから香華を焚いて、少尉の英靈を慰めたといふ。

濱松聯隊の中尉松山●●●●祐三氏（二十六才）も、此の日、重傷を負ふて戰線を退いた。

十一月三日――それは、濱松聯隊に取つて、永久に忘れ難い『痛恨の日』であらねばならぬ。

戰局は、益す展開した。

疾風枯葉を捲くに似た晝夜の總攻擊。

敵は、愈々斷末魔の期に近寄つて行つた。——金城鐵壁と賴む砲臺も、最新式の堅壘と誇つた堡壘も、だん〳〵と我が砲彈に蝕害せられて、今はモウ、陷落の餘命幾許もない。

勝ち誇つた我が軍の攻擊は、眞に、疾風迅雷的だつた。

時は、恰も月明。

皎々として、山東の野を銀色たらしめた深夜に、劍尖の閃めきは一層物凄く、

『突貫！』

の聲は、晴れ澄んだ秋の空に冴え渡つて、一入高く、あたりに響音した。

ポンプ街の小堡壘奪掠！

我軍は

『モルトケへ！』

『ビスマルクへ！』

と、殺到した。

斯うした白兵戰が尙ほも續行せられて、總攻擊開始の日から八日目の十一月七日早朝、遂ひに我が攻圍軍は、ビスマルク、モルトケ、イルチスの三堅塞を突破し、一擧、靑島市街へ迫らんとした。

あゝ、此の時！

見ずや、高空に、ハタ〳〵と飜へる天文台上の白旗の力なき姿を！

勝つた！

遂ひに勝つた！

我が帝國は、傲岸不遜の獨逸を此處に膺懲して、二十年の長恨を今こそ復讐し得

たのであつた。

偉なる哉、我が常勝軍の力や。

尊き哉、我が　天皇陛下の御稜威や。

斯くて、戰鬪中止の喇叭は山谷に響音して、嚠喨と鳴り響いた。

そこに殺到せる將卒が、額の汗を拭ふて、軈て仰げば、目に入る要塞の壘上悉く旭旗翩翻たり矣。

『萬歲！』

思はず絶叫したその聲々は、山東の凡てを震撼せしめずには置かなかつた。

時に午前七時。

うら〳〵と昇つた旭光も、今日は殊更ら、意味深く思ひなされたのである。

其十二　歡樂の日

(一)　待たれた快報

七日午前十時三十分、●●●川參謀總長、●●島村軍令部長、相前後して宮中に參內、天皇陛下に拜謁の上、靑島攻圍軍及び封鎖艦隊の狀況より各砲臺、堡壘の占領、敵の白旗を揭げて降りし顚末を言上した。此の時天顏麗しく、深く我が忠勇なる陸海軍將士の勞を御嘉賞あらせられたとある。——

岳南の人々の鶴首して待つた大快報の到達。

それは、

『十一月七日午前十一時五十分』であつた。そうして、誰れも、彼れも一時に熱狂した。攻圍軍に屬して居る——悴——友人——兄人——弟——夫れ等の武運を氣遣ふのを忘れて、嬉れしさに熱狂する遺族も多かつたのであつた。

静岡――濱松――沼津の都會は勿論、雪崩のやうな勢ひて知れ渡つて行く『青島陥落』の一大快報は、山の麓、小さな町々も、川のほとりの小さな村々へも、忽ち訪れた。そうして、必ず其處の部落の人達ちを熱狂せしめ、踊躍せしめた。

各新聞の號外は、常よりも勇ましい鈴の音を立てゝ巷を駈けて行く。捻鉢巻きをした額の邊へ、我が海陸の小さな兩軍旗を交叉して、勢ひ込んで馳せて行く號外屋もあつた。

國旗を出す家。

球燈を出す家。

『祝青島陥落』此んな店頭飾りを出し、行人の注意を惹く素早い商家もあつた。

須臾にしてざわめきの巷。

岳南の地は、到る處、欣びの色に滿ち充ちて行つたのである。――陥落の新聞號外を手にした靜岡聯隊の補充隊でも、遽かに色めいて

『俺が行かぬうちに、陥落とは情けない』などゝ、口惜しがる活潤な、年少將校もあつた。

靜岡市では、豫ねて今日の歡樂の日の近くに訪れることを窃かに期して、其の祝賀の方法を、既に萬端整へてゐた。それは、官公民合同の大提灯行列――簡單で、最も華やかな催しであつた。

ざわめきのうちに日は暮れた。

軈て、中空に轟く煙火數發。それは、提灯行列の擧行を知らせる合圖であつた。

——熱狂した市民は、提灯を手にするのみの行列では滿足しない。萬燈——作り物——屋臺——馬鹿囃——此んなものを引き廻して蜿蜒數十丁。斯うした壯觀を見んものと通路に人垣を結んだ人の群と、行列の人達ちとの間には、絶えず

『萬歳』

の歡聲が交換されて、常に靜かな此一都會も、今宵ばかりは喧擾の渦を捲きつゝ更けて行つた。

行列は、靜岡聯隊兵營前で、三唱の萬歳を合圖に解散した。

——濱松も沼津も、その他の各地でも、七日から八日にかけて、斯うした祝賀の形式の下に、包み切れぬ喜びの思ひを發散したのである。

一ヶ月前にも、岳南の人々は、萬歳を呼號した。而し、其の呼號する萬歳の聲の餘韻には、『別離』を意味する悲壯な響きが籠つてゐた。——今、叫ぶその萬歳の聲々には、心から絞り出される『歡喜』の響きが、力强く籠つてゐる。

斯うして、歡樂の夜は、短く、呆氣なく過ぎ去つたけれど、感銘せられた『十一月七日』といふ日は、岳南の人達ちの、永久に忘れ得ぬ紀念の日であらう。

——深うなりまさつた富嶽の雪は、此の日、愈々白うして、常よりも更に氣高く仰ぐがれた。

(二) 陷落後の青島

岳南旅團の管下各地の上下民衆は、包み切れぬ歡樂の餘勢を、尙ほ翌日の八日にまで發露して、家業を手にする人達ちは至つて尠なかつたのである。

敗殘の青島。

陷落後の青島。

青島を陷落せしめたのちの帝國の態度。

此んなとについては、熱狂の最高潮に達した多くの民衆が、殆んど閑却してゐるやうであつたけれど、我が政府の發表する公報と、大官等の談話を綜合して以上を忍ぶに曰く、

――青島は七日を以て陷落せり、然れども猶ほ交渉を重ねたる上諸般の手續を經る必要あるを以て、正式に青島を我軍の手中に收むるは、向後尚ほ數日の後ならざる可からず、降服の手續は、全然出征軍司令官の權限に屬するを以て如何なる條件に於て、如何なる形式を採る可きか、全く付度の自由を有せず、要は敵軍の從來及び現在の態度によりて、全然無條件にて引渡を了す可きか、將た何等か同情ある條件を附帶す可きかを決定す可きものなり、彼の日清戰爭當時に於ける威海衛の如きは、比較的同情ある條件を以て降服を容れたる一例なりとす、我封鎖艦隊の大部分は、向後尚ほ或時期迄は現時の儘にて持續す可きも、其任務は從來の戰鬪及び警備に非ずして、單に取締の意味に於て、灣外の封鎖線を保つに過ぎざる可し、南洋及び印度洋に在る獨逸軍艦に取りては、青島の陷落は寧ろ豫期せる事實にして、何等影響する所なかるべきは論無し。

青島將來の處分方法に關しては、別に其當局あり、然れども歐洲に於ける戰爭の繼續中は、當然青島は我國の手中に管理せらる可く、對支那關係に至りては、歐洲戰亂の終局後に於て始めて生ず可き問題ならん、歐洲諸國に對する青島陷落の影響は、之れ全く豫期せられたる事實なるを以て、國運を堵せる烈强の輿論に對しては、恐く甚大なる感動を惹起するに至らざる可し、青島の軍事的價値は敢て喋々を要せざる所なれども、獨逸が二十年間に亘り、一億數千萬圓を投じて完成せる設備は、殆んど全部破壞せられたるを以て、將來青島を經營せんとする國家は、其軍事的設備を復舊するのみにて、優に獨逸の支拂ひたる費用の半ば以上を投ぜざる可からず、故に將來青島を經營せんとするものは

寧ろ此多大なる犧牲を支拂ふ前に、商業上の施設を完成し、經濟上の利益を獲得するを以て第一着手とするの勝れるに如かざる可きか云々。（鈴木海軍次官談）

●●大隈首相は曰く、

歐洲戰亂の勃發するや、日本が如何なる態度に出づべきかは、世人の均しく注目せし所なりしが、此の間に在りて獨逸は頻りに太平洋上に軍艦を出沒せしめて、交通貿易を妨害し、一方膠洲灣の防備を益々堅固にして東洋の平和に危害を及ぼすこと、頗る大なり、我政府は日英同盟協約の條章に基き、英國政府と隔意なき協議を遂げたる結果、八月十五日獨逸政府に最後の通牒を發し、東洋平和維持の爲め反省を求めたるも、之に對し其期間に何等の回答なかりしを以て、遂に同二十三日宣戰の詔勅を御發布あり、直ちに軍事行動を開始したる次第なるが、我勇敢なる軍隊は爾來海に陸に頑強なる獨軍の抵抗と、數回に亘る山東の暴風雨とに遭遇したるも、毫も屈することなく、豫定の計畫通り行動

し、遂に最も紀念すべき十月三十一日天長の佳節を以て總攻擊の序幕を開き、一週間にて早くも青島陷落の快報に接したるは、豫て期待せる所とは云へ、實に意外の感あり。

膠洲灣は獨逸が十七八年の長きに亘り、辛苦經營東洋の勢力中心として固守し、東洋平和攪亂の根據地として●●●●カイゼルの重きを爲せる所、今我勇武なる皇軍の爲に早くも敵對能力を失へることは、獨り帝國臣民の精神上、其他に好影響を及ぼすの大なるのみならず、其反響は世界的にして、特に聯合軍の士氣には、極めて密接の關係あるものと信ず、少くとも青島陷落の捷報は、同盟軍に無形の聲援を與ふると同時に、敵軍をして恐怖の念を强からしむるものあるべし、或は之れが爲に平和克復を早むるの動機となるやも圖り難し、兎に角今回の大勝利に接したる我輩は、赤心之を喜び、邦家の前途の益々多幸なるを祝福するものなり云々。

一消息通の曰く、

占領後の青島は、當分神尾司令官の下に軍政布かるべく、追て或時期を相し日英の協商を經て總督府を置かるべし云々。

斯んな噂の頻りに傳へられてゐる時、一方青島を攻略した神尾司令官は、其の日の午後七時五十分を期し、我が全權委員陸軍少將山梨半造、海軍少佐高橋專太郎の兩氏と、敵の全權委員ザックセル大佐との間に、開城規約其の他の締約をなさしめたのである。

兩全權使會見の場所は、戰後を受けて徒らに荒廢したモルトケ山上のバラックであつた。——その夜、兩軍使の間に練られた開城條件の經過は、只だ神尾司令官の提出した條件を、敵は其のまゝ無條件の下に、一切を肯諾したまでに過ぎなかつたのである。

その規約——要塞、其の他戰鬪員受渡し——の實施は、十日午前十時を以て、支

障なく執行せられた。斯くて、我が手に歸した俘虜は、ワルデック總督以下二千四百九十六名であつたのだ。

間もなく、神尾司令官の入城式が壯烈に擧行せられた。斯くて、全く膠洲灣は、獨逸政府の手を離れたのである。——カイゼル陛下の、東洋攪亂を試むる唯一の策源地を、全く芟除したのである。

東洋禍根の全滅。

その功勳は、『偉大』なものであらねばならぬ。

勅語

畏くも、我が天皇陛下は、青島陷落の日、忠勇果敢な青島攻圍の我が陸海軍々人に對し、次ぎの如き勅語を下賜せられた。

青島ハ敵ノ東亞ニ於ケル唯一ノ根據ニシテ水陸ノ防備寔ニ侮ル可カラサルモノアリ

青島攻擊ニ參加シタル我陸海軍ハ開戰以來協心戮力勇戰奮鬪其ノ堅壘ヲ拔キ其ノ艦艇ヲ沈メ遂ニ敵城ヲ陷レ以テ戰鬪ノ目的ヲ達シタリ

朕深ク汝將卒ノ克ク其ノ重任ヲ全ウシ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

其十三　犧牲の人々

(一)　嘘、高千穗艦

戰爭は、權利の衝突である。

そうして、絕大な『悲劇』其の物であつた。

敗殘の悲哀。——

勝利の哀愁。——

戰爭は、遂ひに、汎ゆる悲劇の頭であらねばならぬ。

我が海陸軍の、青島要塞攻略は、最も進步した戰術に伴ふ攻城法に據つたものであつた。而して、總攻擊開始以來陷落まで僅々一週間——そこに、日東常勝軍の面目の躍如たるものあり、何人と雖も戰鬪參加の將卒の勇武を讃美せぬものはない。

——けれども斯うした勝利に伴ふ傷ましい犧牲者の上に、痛切な思ひを廻らすもの、果して幾人あるであらう。

最大な勝利の歡樂に亂醉するものは、必ず其の半面に、最大な犧牲を拂ふてまでも、其の勝利の將來を速かならしめた、傷ましい戰死者の『死』を、痛切に考へねばなるまい。

犧牲の人々。

哀傷すべく、又た尊敬すべき犧牲の人々！

八月二十三日の宣戰發布以來、十一月七日の青島陷落まで――海に、陸に、尠なからぬ之等の犧牲の人達ちの、『生』を捧げて軍國の事に當つた其の精神には、毫も優劣を認めないけれども――忘れもせぬ十月十七日の夜半、膠洲灣外の哨戒勤務中敵の機械水雷に觸れて、艦と共に其の生命を失ふた高千穗艦乘組二百七十一名の、『犧牲的精神』は、我が帝國上下民衆の、二十年間の長恨を獨逸に報復し得た意味に於て、今回の戰爭を將來に牢記すると共に、決して忘却の出來ない、重要な附帶事件であらう。

高千穗艦は、最早や艦齡の老ひた、老朽に近い船であつた。而し、乘組の將卒は何れも勇猛果敢、海國男兒の『精華』を發揮した人達ちのみであつた。――

東京芝區白金今里町　大佐　伊東祐保　横須賀市汐入　少佐　古賀賢吉
鳥取市吉方町　大尉　間宮愛　神奈川縣鎌倉町小町　大尉　谷井德之助
岐阜縣稻葉郡鶉村　大尉　堀江平彌　兵庫縣赤根郡高畠村　大尉　矢田滿丸

東京小石川區大和町　大尉　松田昌生　横須賀市坂田山三四三　大尉　中島外喜男
豐後國直入郡竹田町　中尉　原田留吉　栃木縣宇都宮市池上町中尉　生方乙彦
横須賀市中里　中尉　窪德次郎　兵庫縣津名郡洲本町　中尉　角村利平
長野縣北佐久郡小諸井少尉　小山竹治郎　愛知縣西春日井郡金城村少尉　黑川彦吉
横須賀市公鄕　機關少佐　安達榮藏　石川縣金澤市池田町機關大尉　青木老次
横須賀市汐入長源寺內機關大尉　大川忠吉　福岡縣築土郡里士村機關大尉　有門清
東京府澁谷町中澁谷機關少尉　小岩義男　群馬縣群馬郡片岡村機關小尉　渡邊兵太郎
東京府下荏原郡大森町大軍醫　小島忠三郎　新潟市白山浦　中軍醫　小俣幹翁
吳市上古江　大主計　村岡春馬　横須賀市深田　中主計　安田義隆
同　上等兵曹　山岡春次　同　同　山田次郎
同　上等機關兵曹　石井胤二　同　上等機關兵曹　佐藤三虎
同　上等兵曹　安立利吉

伊東艦長以下、以上に列記する二十八名の乘組將校中、生存したのは只だ一人の『生方中尉』あつたのみである。下士卒は、二百四十三名、その英靈は、何れも綿々として盡きない怨恨を抱いて、膠洲灣外に

『犧牲の精神』

を、發揮したのであつた。

本縣に關係のある殉難者としては、將校では松田大尉——大尉の夫人は、靜岡市の素封家野崎彦左衛門氏の令孃壽榮子であつた。而も、其の媒酌人は、靜岡縣國民黨選出前代議士井上彦左衛門翁であつた爲め、

松田大尉

大尉の『傷ましい死』を、岳南の人々は、痛切に感銘せざるを得なかつた。

兵卒では、磐田郡西貝村西貝塚六十一出身一等水兵山田佐平氏(二十一才)——磐田郡井通村永森出身一等木工鈴木房吉氏(二十四才)——安倍郡長田村石部出身一等機關兵鈴木永藏氏(二十四才)——榛原郡地頭方村字落居出身二等水兵若松八太郎氏

(二十四才)——田方郡中郷村出身の主厨風間邦太郎氏(二十四才)——富士郡大宮在一等水兵久保田伊之助氏(二十四才)——賀茂郡稻取村三等水兵山田富藏氏(二十四才)——

斯うした犧牲の人々の半面には、何れも涙の出るやうな、いろ〳〵な挿話があつた。母の病中に出征した風間氏は、程經て母が病死したけれども之れを知らず、實兄佐太郎氏に宛てた書翰に曰く、

『前略御免下され度候、母上事御病氣は如何に在らせられ候や心配に御座候、なれど便りなきは定めて變りなく追々御快方に向はれ候事と遙察仕り、少しく心安く思ひ居り候、何分とも御靜養の上一日も早く御全快祈り候、不肖が戰地に於て敵艦を打沈めて、雄々敷凱旋する日を御待ち下され度偏に願上候』云々。

而し、此の書翰は絶筆となつた。——母の死も知らずに、死んで行つた其の哀れさは一人深い。

膠洲灣、今や我が手に歸す。

二百七十一名の犧牲の英靈――、ほゝ笑みもしやう。

(二) 万骨枯る

萬骨枯るれば、そこに一將の功が成る。

青島攻圍軍の火蓋を切つて以來陷落の其の日までに、山東の野に流した我が將卒の鮮血は、決して少なくない。――その『犧牲の鮮血』は、青島の陷落といふ最後に依り、花も實もある報酬を見たけれど、一度び思ひを廻らして『犧牲の鮮血を流すまで』の徑路を聞かば、今更ら悲壯の熱血の泡立つを覺えずにはゐられない。

――想ひ起す九月二十八日の巫山攻擊の難戰苦鬪――堀内旅團管下鶴見聯隊の大

尉佐藤嘉平次氏（其九戰鬪參加、二項非戰鬪員立退參照）は、出征前既に浮山占領を

山田上等兵 戰死

杉山一等卒 負傷

朝比奈一等卒 殊勲者

寺尾軍曹 殊勲者

期し、自ら出願して決死隊に加はつたのである。茲に於いて鶴見大佐は、別に一個小隊を近藤見習士官に授けて、浮山の背面に迂回せしめたが、日頃容貌魁偉、剛力無双と謳はれてゐた川本軍曹は先づ巖角を攀擧して、敵と搭鬪を始め、之を捻伏せて更に進まうとする所を、爆彈に頭を碎かれ、續いて一等卒山口彌平、同福田末藏が同じく爆彈に紛糞された。兩人共兄弟揃うて同じ聯隊に居るのであるが、悲しむべし山口は兄を福田は弟を殘して先立つた。

一方前面に在る佐藤大尉は、卒三名を道案内に立てゝ嶮岨な岩路を匍匐しつゝ登る中、卒三名は忽ちにして射斃され、續いて大尉も兩側より腹部を擊たれ、首に掛

けた双眼鏡は創口深く喰ひ込んで居た。而も大尉は尙ほ屈せず、劒を揮つて突進中、爆彈に兩脚を拷ぎ取られ、遂に落命した。斯くて岡中尉代つて中隊を指揮したが、是れ亦間もなく爆彈に斃れ、再び瀨戸中尉が代つた。

敵は巖頭に小銃を横たへ、照準を定めて登り來る者を悉く蝗刺しにする。此の彈丸急驟の如き中に、中隊は猛進猪突して背後の小部隊と共に敵を挾撃し、茲に捕虜三十名を得、更に、藤吉少尉の率ゐる他中隊の一小部隊と協力して、他の巖窟に據れる敵兵三十餘名を攻撃し、遂に是等の敵兵を悉く捕虜としたのである。佐藤大尉は氣骨稜々たる快男子で劒道に秀で、人格も高潔、聯隊中での通り者であつた。死する迄ポケットに離さなかつたのは『動員より九月十七日迄の部下の功績四六の四佐藤大尉』と、鉛筆で封筒に記した一通——其れは、血痕斑々と附着してゐた。斯うして巫山の天險は、我が手に歸した。こゝで流した佐藤大尉等三十三名の尊さ『犧牲』の血潮の報償であらねばならぬ。

早馬貞特務曹長傷

我が第二十九旅團管下の『犧牲』の人々は、青島要塞總攻撃の開始せられた十月三十一日から、十一月七日朝の陷落の日までに、戰死——負傷を取交ぜ軈て五百にも達しやうとした。その他、參加の各旅團の『犧牲の人々』を通算したならば、

『青島陷落』

村越戰少尉死

といふ、絶大な歡樂の聲も、長恨と悲愁の籠つた、一種の哀語ではあるまいか。

十一月七日の夜、青島陷落を狂喜して祝ふ濱松の人々の歡聲を、どよめきのやうに聞いた戰死少尉村越卯平氏の家族は、其の夜一夜を、如何な心持ちで明かしたことであらう。

少尉の遺兒——長女千代(六才)次女春子(五才)長男孫太郎(三才)之等の仇氣ない

子供等は、門前を練つて行く提灯の群に、小さい手を擧げて萬歲を叫んだことであらう——血のやうな涙を絞るのは、獨り未亡人品子のみではなかつた。

誰れに聞かしやうとての萬歲の聲ぞ。

白木の位牌が怨めしい——提灯の群が呪はしい。

中尉村貞少傷

品子未亡人の小さい胸は、麻のやうに亂れずには置かなかつた

濱松聯隊の犧牲者、濱松市名殘町の歩兵一等卒本間巽氏（廿三才）の老父は、その夜の祝賀を如何に見たであらう——愛兒の血を以て塗られたやうな提灯の赤い灯。隣人も慰安の言葉に窮したことであらう。

——小笠郡南郷村字東西郷豫備上等兵渡邊半平氏（二十五才）——之れも『犧牲の一人』であつた。

斯う思ふて、その

『犧牲の人々』

の五字の聲をぢッと耳を澄して聞けば、そこに云ひ知れぬ『悲痛の響き』が充溢してゐる。

陷落——凱旋——斯う云つた花々しい出來事の爲めに熱狂し、欣躍せんとする前、先づ吾等は、哀傷ずべく、又た尊敬すべき、

『犧牲の人々』

の五ッの文字の響きを、痛切に味はねばならぬ。

氣の早い新聞が、青島攻圍軍司令官神尾光臣氏、第二艦隊司令官加藤定吉氏以下各武將の論功行賞を傳へてゐる。

一將功成つて、眞に萬骨枯る。

山東の異鄕に眠る我が同胞の寂しい墓標に、モウ朝霜が深からう。——

——終——

附錄

＝戰死傷者人名＝

▲靜岡聯隊の部▼

負傷　少尉　丹羽玄
同　一等卒　杉山兼吉
戰死　一等卒　山本幸作
負傷　少尉　中村種樹
同　特務曹長　早馬銀助

▲濱松聯隊の部▼

戰死　少尉　村越卯平
同　上等兵　田邊半平
同　上等兵　山田五郎
同　上等兵　村木傳吉
負傷　一等卒　川合兼一
同　一等卒　鈴木太吉
同　一等卒　谷野銀作
同　一等卒　伊藤重太郎
同　中尉　松山祐三
戰死　二等卒　西尾藤平
同　上等兵　川合圓吉
負傷　上等卒　上谷眞二
同　一等卒　大塚友一
同　二等卒　本田八十松
同　一等卒　博林壯平
同　少尉　黑川清
戰死　一等卒　本間巽

▲特科隊の部▼（何れも本縣出身）

負傷　工兵一等卒　遠藤信一
同　工兵一等卒　中島福作

同　工兵一等卒　夏目次郎七
同　工兵二等卒　秋山善佐
同　工兵一等卒　神谷義之助
戰死　工兵一等卒　森清一
同　工兵上等兵　三谷孫四郎
負傷　工兵一等卒　伊奈波善吉

同　工兵軍曹　鈴木寅藏
同　工兵一等卒　前島正太郎
同　工兵二等卒　持塚音儀
同　工兵二等卒　酉ヶ谷金作
同　工兵二等卒　中島清作

（他は別冊子として記載す）

▲急告▼

本書附錄として第二十九旅團管下の出征將卒人名表を添付すべく既に全部の調査を終へ製本發行の前日突如左の陸軍省令發布右發表不可能となりしより止むを得ず之れを削除せり。

出征諸部隊ノ隊號又ハ所屬將校下士卒ノ官氏名ヲ示スハ差支ナキモ部隊號ヲ列記シ若クハ部隊相互ノ隸屬關係等ヲ示シ又ハ部隊所屬ノ將校下士卒ノ員數若ハ氏名ヲ列記シ由テ以テ部隊ノ編成ヲ窺知スルヲ得セシムルガ如キ記事ハ之ヲ掲載スルコトヲ得ス

而して右解除の日も近かるべきを以て解除と同時に人名表のみを一冊に纏め既に申込みの諸氏へは無代にて提供し二版發行以後は附錄として本書中へ組込む方針也。

本書の廣告を取扱ひたる いなづま廣告社の活動に就て

本書が素と岳南征士の忠勇を記念せん爲の出版なる性質上之を普通刊行物に比すれば勞力と報酬との相伴はざるは勿論更に出來得る限り廉價を以て頒布せんと欲する点より勢ひ尠なからざる損失の犧牲を覺悟せざるべからざる義務を感じつゝありし也然るに圖らずも いなづま廣告社 の此企畫の爲に奮起するあり獨得の廣告蒐集術を揮つて廣告を飾り以て一段の好記念を添へたると共に出版費負擔の輕減を得せしむるに力ありしは本會の多とする所、一言江湖に紹介して玆に其健全なる發展を祝福す

岳南健兒出版協會附記

◀懸賞◀

よこ字さがし

此廣告全部を取扱へるいなづま廣告社は本書の讀者に對し社主松井七郎編纂の『靜岡みやげ』と題する靜岡名所人物等一切を網羅せる厚紙三色刷百頁寫眞版百四十四入（定價一圓廿錢）の頗る美本廿部を提供し左の懸賞餘興を行ふ

一方法　本書廣告全部の內よりよこ字を探し出すべし之を集めれば一の連續せる地名社名人名となる讀者は之をはがき（に限る）に記載し靜岡市西草深町十二番地いなづま廣告社に送らるべし正解者は右の賞品を受くることを得但し正解者數廿名を超過する時は廣告主の立會を乞ひ抽籤（いなづま社代抽）の上決定す〆切は大正三年十二月廿五日抽籤は大正四年一月五日直に賞品を發送す

靜岡縣藤枝町

志太電氣株式會社

長電話一四一番

辯護士

岡崎伊勢藏

静岡事務所（紺屋町四十八番地 長電話六八七番）

濱松事務所（傳馬町五十番地 長電話八四二番）

静岡市屋形町市立病院前

東海看護婦會
仝養成所
長電話 四一二番

濱松市五社通り

東海看護婦會
濱松支部
仝養成所
長電話 九二七番

新潟市東堀通り一番町

新潟看護婦會
仝養成所
長電話 八七六番

東海道藤枝驛前

藤相鐵道株式會社

長電話一三六番

◎冬物新荷着!!

久

靜岡市本通二丁目

青茶屋吳服店

店主 堀田五一郎

長電話 六十三番 九二二番

矢車サイダー製造元

和洋酒類醤油商

サッポロビール特約店

靜岡市上石町二丁目

長谷川房次郎商店

【長電話百三十七番】

土木建築請負業

山口忠五郎

本店 西駿藤枝町 長電三二番

支店 靜岡市下魚町 長電三二〇番

株式會社

靜岡米穀取引所

●店舗の大改革!!

弊店儀時世の要求に應じ營業方針に大改革を加へ
店舗一切を陳列式正札付とゝし凡て商品は産地と
特約し季節向德用品のみ撰定し薄利多賣を主義と
し且御あつらへ品及御仕立物等は御約束の日時に
違はざる樣實行可仕候間續々御用命の程奉希上候

靜岡市梅屋町角

長田屋吳服店

長電話【二七三番】

本行 兩替町 長電二十八番 一〇〇九番

株式會社 靜岡實業銀行

支店 譽田町 長電二六七番

◎勸業貯蓄債券賣買！

○特殊販賣規定値段表御申越次第送呈ス

東海道江尻町新道

西ケ谷債券部

長電話（一六番）（四四番）

株式會社 三十五銀行

長電話 三五 三五八 七二〇

支店

濱松 電話【三五八番】

沼津 電話【一三五番】

江尻 電話【一四八番】

堀之内 電話【一三〇番】

倉庫

静岡驛前 電話【五七七番】

同紺屋町 電話【九一九番】

江尻 電話【四八番】

清水 電話【六五番】

堀之内 電話【三〇番】

辯護士 丸山文司

静岡市四ッ足町九番地

長電話 九六五番

土木建築請負業

事務所（東海道岩淵驛 長電話七番）

出張所（靜岡市紺屋町 電話七二三番）

勝呂平右衛門

最上醤油釀造

允 山村九兵衛

靜岡市下魚町五十番地

長電話【四四六番】

允 山村東京支店

東京市本所區綠町五丁目

長電話【架設中】

ゴム

人力車タイヤ
自轉車タイヤ
仝上附屬ゴム
ゴム管ホース類
飛行器用糸ゴム
印材ゴム
パッキング
其他ゴム製品一式
●定價表進呈
○屑ゴム古ゴム高價買入仕候

靜岡市江川町
東京井田ゴム會社
靜岡縣販賣部
主任 海野森吉
長電九八〇番
靜岡局私書函三十一號受信

營業目錄

●杉天井板 ●床用唐木
●日本銘木 其他建築普通用材

㊀ 的場源七郎商店

靜岡市淺間通馬場町

電話七一三番
電信暑號〔マ〕

專賣特許 三角定規製造元

靜岡名產 志太筆

發賣元 小野文昇堂

靜岡市吳服町三丁目

電話 二一一番

米國聖路易萬國大博覽會

金牌受領

最上醬油釀造元

登錄商標

靜岡市茶町壹丁目

築地金次郎商店

電話五九番 電略【ツキチ】又【ツ】

振替口座東京二一二三七番

●●●●皮膚病
花柳病
泌尿生殖器病
肛門病

入院隨意

靜岡市裏一番町 電話一〇五八番

生春堂醫院

院長 醫學士 本間俊
次長 醫士 紅林清治

●氣つけ、毒下し、ほうそう、はしか、ふつう、
酒あたり、驚風、小兒五疳、ねつ諸病によし

大野 一角丸

定價表

金五錢	金三十錢
金十錢	金五十錢
金二十錢	金一圓

上總國東金町
本舗 大野傳兵衛
靜岡市梅屋町
代理店 森文吉商店
長電話一四九番 振替東京一一五六番

靜岡市呉服町五丁目
武田糸店
長電四五五番

●利益配當附の貯金理想的の金融機關●

資本金壹百萬圓

東京市神田區千代田町廿九番地
株式會社 共榮貯金銀行
電話本局長二九三七番 三三六九番

●今回共榮貯金株式會社は本行と合併し從來の通り至便なる信用貸付と利益配當付の貯金を主とし其他銀行一般の業務を懇切に取扱可申候間何卒舊會社同樣御引立の程希上候

支店 靜岡、大津、京都、大坂、神戸、和歌山、岡山、廣嶋、下關、門司、小倉、筑前若松、福岡、佐賀、長崎、久留米、熊本、松山、敦賀、福井、金澤、富山、長岡、會津若松、福嶋、仙臺、米澤、秋田、盛岡、弘前、青森、函館、小樽、札幌、旭川、

專務取締役 戸田喜一郎 同 中山增次郎 同
常務取締役 小出熊吉 同 酒井利吉 監査役 星野虎吉
同 杉浦一郎 同 小出好次郎 同 石井彦治 坂本善重

靜岡市兩替町四丁目一番地
株式會社 共榮貯金銀行靜岡支店
專務取締役 戸田喜三郎
主任 篠原金七

營業品目

●和洋酒、食料品、鑵詰、食卓器、
●割烹具、洋菓子、飲料水其他

三吉屋

靜岡市吳服町四丁目

平岡商店

長電話三百十七番
振替口座五四〇五番

●御進物用品の新荷着！

謹告

一般銀行業貯蓄預金

株式會社 中外興業銀行

靜岡市本通壹丁目八番地

靜岡支店

電話一二六五番

志太郡德山村堀之內

同行 川根代理店

辯護士 成瀨駒次郎

靜岡市裏一番町廿九番地

長電話（二一八番）

株式會社

安達銀行

靜岡市江川町

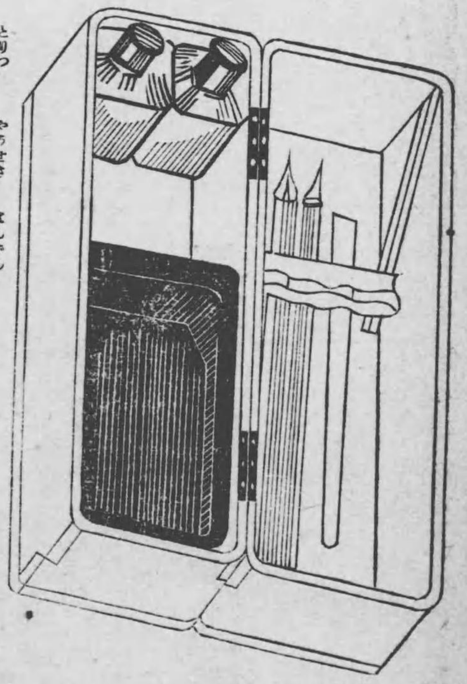
長電話（五十四番）

便利なる硯箱の提供

實用新案登錄

第參參六貳號

大正硯箱



本器は硯石用のみでなく墨池並に「んき壺等も容れる様に作りしもあり

特色

(1) 蓋を蝶番にて取付け容積を半減したること

(2) 蓋裏を利用して筆押兼用の筆架を裝置したること

(3) 蓋の開閉が便利なること

(4) 毛筆の乾燥と硯石の塵芥を防ぐこと

(5) 形狀が優美で經濟的なること

右の特色がありかすゆる官廳學校會社商店用としては勿論家庭用に頗る適當なると共に髹漆描金にも意匠を加へ御進物並に賞品景品用等に格合なる品を種々取揃へてあります又高需に依り特製しますから御用命願升

◎特約希望見本御入用の方は御一報次第直に發送可仕候

大正硯箱製造販賣本店

佐野屋

㊗ 武藤孫左衛門商店

（電話 六十五番）振替貯金口座一一七五九

内外國向漆器記念木盃金銀盃品評會等賞與品竹器齒朶細工御婚禮道具一式

專門耳鼻咽喉科

靜岡市追手町

加藤醫院

電話 千〇十二番

院長 加藤鍬作

愛知醫學士 鈴木赳

（ドクトル メヂチーネ）

復明舘本院

司馬外科醫院

静岡名産元祖 山田葵漬

其他 漬物罐詰奈良漬
味噌製造販賣

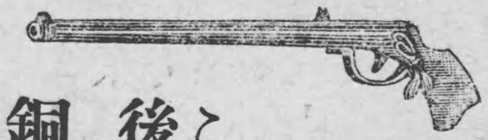
静岡市紺屋町驛前通り

�十 丸屋本店

長電話 百五十六番
振替口座東京三一七七番

賜宮内省御買上榮 陸海軍御用内外國博覽會共進會品評
會名譽賞及金銀銅杯賞狀等數十回受領

●新式完全なる空氣銃と霰彈



●米國製デーシー千連發空氣銃 特價金四圓八拾錢也
●米國製改良キング單發空氣銃 特價金參圓參拾錢也
●米國製ターゲット單發空氣銃 特價金壹圓八拾錢也
●蛇目印霰彈縣下特約大販賣
○地方よりの御注文は特に送料全部當店に於て負擔仕候

これなら安心

後藤金庫 代理店

銅鐵商 大甚金物店

静岡市上魚町 (長電話 (二百十五番) 電報 (ヲイシ) 振替東京 (一〇〇一六番))

○和洋酒類醤油商
○カブトビール特約店（丸五組）

藤八木熊吉商店

靜岡市江川町貳拾六番地
電話〔貳百七拾七番〕

▲營業種目▼

●疊表、花莚、綠地、柳竹行李、傘笠、旅行用鞄、
●手提金庫、夏冬座布團、蚊張、御簾、麻類

直藤田金作商店

靜岡市吳服町五丁目廿九番地
電話〔二百二十九番〕
振替口座東京〔一七五三四番〕

內外國向漆器指物

卸商

本舗

五

漆器店

販賣部

靜岡市茶町壹丁目
電話長四十五番

電話三百五十一番

靜岡市吳服町五丁目角
振替口座 東京六三五八番

◎◎產婦人科
◎花柳病科 入院隨意

靜岡市鷹匠町一丁目壹貳番地

佐橋醫院

長電話七二一

院長 醫學士 佐橋良彥
次長 醫士 田口初吉

靜岡停車場

東海軒

長電話（三〇八番）

靜岡市紺屋町

大東館

長電話（六十六番）

靜岡市紺屋町

品川屋

長電話（一一一番）

靜岡市紺屋町

榮松館

長電話（一五〇番）

仁

静岡市吳服町四丁目

からきや藥舗

藥劑師　秋山儀兵衛

電話（二百六拾六番）

（酒類）

●和洋酒類商　溝口和平

静岡市新通り六丁目

電話【三百二十三番】

（料理）

●御手輕料理　西洋御料理　溝口勝美軒

静岡市新通り六丁目

電話【三百二十三番】

●御手輕料理
御茶めし
和洋酒一杯賣　溝口酒場

静岡市七間町一丁目

長電話【九八四番】

貴金属美術品

金銀盃類製作所

〈一〉 川口猪三郎

静岡市兩替町一丁目

〈一〉 川口濱松支店

濱松市板屋町一丁目

辯護士 中野福三郎

静岡市研屋町

長電話 二四八番

靜岡一眞ノ安賣

（營業品目）

○吳服太物類
○メリヤス類
○タビ類各種
○本セール類
○大正セール
○綿子ール類
○小倉スホン生地
○足袋生地專業
○手拭風呂敷類
○チール仕立物類

靜岡市兩替町六丁目
〈川 伊藤商店卸部
電話【五百六十三番】

靜岡市兩替町六丁目
〈川 イトウ小賣部
電話【五百六十三番】

調胃散

（一廻分金拾錢）

本劑者胃病一切ニ用ヒテ其効驗驚ク可キ程ニテ世上有リ觸レタル賣藥之比ニ非ラズ服用者之禮狀ニテ明ラカ也胃弱、胃痛、胃加答兒、胸ヤケ、胸痛ヲ直シ患者ハ速カニ本劑ヲ服用シテ實効ヲ知リ賜ヘ

靜岡市兩替町一丁目角
製劑本舗 藥劑師 原理三郎
電話長百七十四番

神州男子は
平和の
爲
劍を執れり

戰勝國民ハ須ク優良ナル菓子ヲ備ヘヨ菓子ノ種類ハ直ニ其家ノ品位ヲ表ハシ
家庭ノ平和ハ優良菓子ノ常備ニヨリ保タルベシ弊店ハ家庭菓子改良ノ爲メ月
三回配達ノ菓子會ヲ設ク

我は家庭團欒の爲め
優良菓子の調製に奮闘せん

靜岡扇子屋

書籍部
器械標本
樂器部

吉見書店

長電話 百四十五番
靜岡市吳服町二丁目
振替口座一一四七八

營業品目

- 貴金属品
- 金銀懐中時計
- 寶石入指輪類
- ダイヤモンド
- 蓄音器及音譜
- 雙眼鏡、眼鏡
- 寒暖計、體溫器

御注文品は品質精撰入念製作致候
御修繕物は精々叮嚀且つ迅速に仕候

關時計店

靜岡市札之辻町

【電話五百十一番】　【振替口座二四五七四】

火災保險營業案内

會社名	資本金	諸積立金並ニ資産總額	創立(日本ノ)
英國コンマーシヤル、ユニオン保險會社	金貳千九百五拾萬圓	金二億貳千貳百九拾萬圓	文久元年
英國ノルウヰツチ、ユニオン火災保險會社	金壹千壹百萬圓	金參千〇貳拾七萬圓	寛政九年
英國フヰニツクス保險會社	金參千貳百萬圓	金壹億四千六百萬圓	天明貳年
英國ロンドン、エンド、ランカシヤー火災保險會社	金貳千六百四拾壹萬圓	金貳千壹百七拾萬圓	文久六年
英國ガーディアン保險會社	金貳千萬圓	金五千貳百萬圓	文政四年
英國ノーザーン保險會社	金參千萬圓	金七千四百五拾萬圓	天保七年
英國サン火災保險會社	金貳千四百萬圓	金五千五百七拾萬圓	寶永七年
英國ヨークシアイア保險會社	金壹千萬圓	金參千五百七拾萬圓	文政七年
英國ノースブリテツシユ、エンド、マーカンタイル保險會社	金六千萬圓	金貳億貳千五百六拾萬圓	文化六年

靜岡縣代理店

③

靜岡市車町五拾貳番地
合名會社 立花保險部
電話長百六十五番
振替口座東京一二六二二番

○ 當店ノ代理致シ居ル右保險會社ハ何レモ英國ニ本社ヲ有シ世界各國ニ於テ營業ヲナシ動産、不動産ノ有ラユル財産ニ向テ最モ確實簡易ニ火災保險ノ契約ヲナス

○ 右保險會社ハ同盟國タル我帝國保險契約者ノ爲メニ特ニ低廉ナル保險料率ヲ適用シ最モ利便ナル條件ヲ提供セン事ヲ務ム

○ 右保險會社ハ何レモ横濱及東京ニ日本支社或ハ總代理店ヲ有シ保險契約上及罹災支拂等ニ至ル迄一切ヲ處理シ日本ノ保險會社ト何等異ナル所ナク殊ニ保險金支拂ニ付テ最モ容易迅速ナルハ其ノ特色トスル所ナリ

◎ 當店ハ前記各社ノ日本内地會社トシテハ『豐國火災保險株式會社』ノ靜岡代理店ヲ經營シ總テノ物件ニ對シ火災保險ノ契約ヲ取扱フ

内科專門

采眞堂醫院

院長 ドクトル メヂチーチ 伴野廣

次長 京都醫學士 木下茂次

靜岡市二番町

電話二百三十四番

靜岡市下八幡町

陰山七五郎商店

長電話【四百六十九番】

最上醬油釀造元

東京市京橋區東港町一

陰山東京支店

長電話京橋【二三二八番】

辯護士

今田鎌太郎

事務所

東京市牛込區神樂町二丁目
長電話番町四一三八番

靜岡市鍛冶町六番地
長電話一一七八番

濱松市傳馬町一五〇番地

最上醤油釀造元

肥料直輸入商

靜岡市材木町
長尾一郎商店
長電話六百八番

安倍郡清水港橋通
長尾一郎商店
清水港支店
長電話二十五番

太物類卸販賣

合資會社

㊋

太物商會

靜岡市江川町

長電話四八番

靜岡市停車場前

明治看護婦會

長電話七百五十番

沼津町六軒町

明治看護婦會

電話百三十八番

辯護士

中田駿郎

事務所 靜岡市兩替町二丁目 長電話百六十九番

本店 靜岡市外大里村川邊 電話五百九十七番

牛乳は八木に限る

今回育兒用牛乳並に
濃厚牛乳をも販賣仕候

八木育牛部

靜岡市外八幡
電話二百八十五番

靜岡市呉服町

實用看護婦會

電話六百四十八番

各女學校御用

縞セル及博多平

袴商

高等袴地各種

御注文品は品質を改め入念仕上仕候

店

後藤幸一郎

靜岡市兩替町一丁目上石町通り

電話(七百九十三番)

大正三年十一月十七日印刷
大正三年十一月二十日發行

定價金八十錢

著者　伊藤咄郎　靜岡縣靜岡市紺屋町五七

印刷兼發行人　山梨孔藏　靜岡縣安倍郡大里村川邊一五二

印刷所　靜岡民友新聞社　靜岡縣靜岡市七間町二丁目二三

發行所　岳南の健兒出版協會　靜岡縣靜岡市兩替町二丁目四四

不許複製

354
81

終